

14. 開発の倫理

開発：理論と実践の紆余曲折の結果（課題や解決方法が時代とともに変化）

開発倫理学（Development ethics）：開発が特定の基準から見て正しいか、間違っているかという考察を意識的に取り上げる

- ① 開発や社会の進歩と言う考え方自体に価値基準があり、それを自認することにより、今まで暗黙のうちに受け入れられていた前提や仮説を検証することを可能にする
- ② 開発の便利さや改善などの成果だけでなく、コストや犠牲が伴う。その政府の両側面を以下に配分するかについて検討
- ③ 複数の開発が可能であるという前提に立ち、費用や効果を吟味して選択の助けとなる＝望ましい社会は1つではない
- ④ 開発を否定するよりも、そのあり方を改良し、その本来の目的である貧しい人々、恵まれない人々が切望している生活向上に資する方策を探る

開発：①望ましい社会のあり方、②長時間かけて社会が変化していく過程、③政府やそれ以外の組織が社会を意図的に変化させようとする行為
→開発は社会的変化全般をさす

【開発倫理学の発展】

1950年代：ルイスジョセフ・レブレ（フランス人経済学者 1897－1966）開発倫理学という用語を使用

1980年アマティア・センが倫理的側面を前面に出す

→飢餓を研究し、その背後の倫理性を追求→開発とは究極的には自由の充足＝飢餓は自由が剥奪された究極の事例（**潜在的アプローチ**）

<潜在的アプローチ>

- ① 経済成長や効率性の向上はそれ自体が目的ではなく、人間が幸福になることが目的。人間が主体的存在としてその価値を発揮できることが重要（人間が経済成長の道具ではなく、経済生産が人間に資する）
- ② 社会の政治、経済、法律などの制度は人間の能力の充実や向上のためにあり、いかに人間の能力開花を支えているかという視点から考察されるべき
- ③ 人間の能力は実際に何を行うことができるかである。それができるかどうかは単に所得や生産高の上昇によって改善されるとは限らない。それには多種多様な内容が含まれ、物質的充足だけではなく人とのつながりや精神的充実感などさまざまな人間らしい感情・欲求や希望が含まれる
- ④ このような能力の充足度は個人間でも国の間でも格差があり、その是正には所得水準の向上だけでは解消されないから、政治と社会的取り組みを含めた総合的取り組みが不可欠

倫理的側面の推進は、**人間を基本に開発を考えるアプローチ**の発展に貢献
→単に結果を重視するのではなく、過程が適切かどうかとも問われる

【誰が価値判断をするのか】

- 生計アプローチや参加型開発の重視
- 今後は環境を含めた人間とそれ以外の生物との共存なども課題となる